

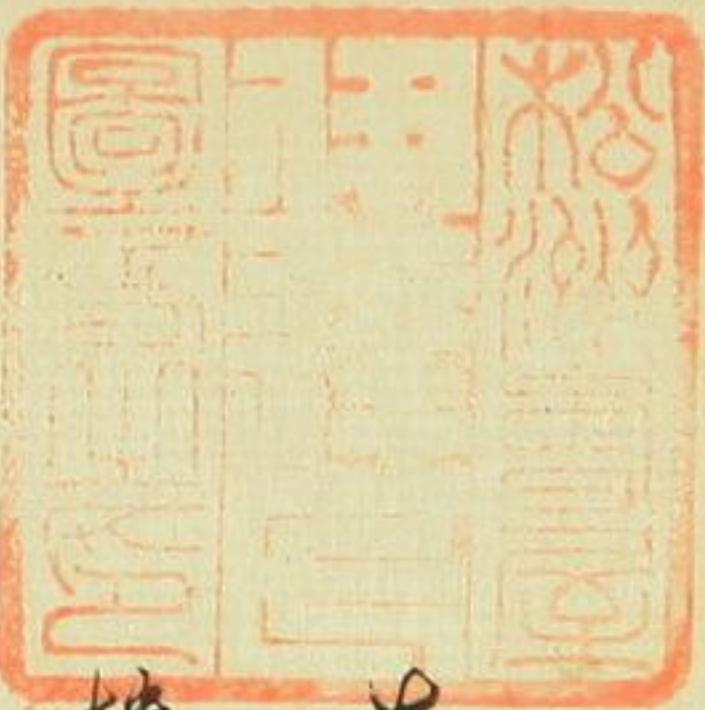
7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6 7

庚子
記



桂園大人
に席、曰
記

あそべ秋の例の鴨川のきがる行
樓より寓居してりとて桂園をうつみて
あわすまじけむけはいあすおれ
こらあめをあまむは哥れ
おれどちーうれそくは先ほ廉ゆ
おもひだらしら體はせの讀法
てれ道のつたかく過もぬよもじ
いきよどき隨ひけらといじあらね



京周せんまやひなく毎うちもま
旅の調度のまづけめまく休水の深
やぬうちいて神濟川よ楫よくて
浦乃神は十日假りいつれの曉を
あくよくはれゆくまく人やうれ旅子
あくよくじるの道をとつてよ四里
五里三里と長濱山路の隈もおち
へどりへどりあるよ巖のうへ

ぬくらむはれぬよあつげてうき
ばくせん折々通れつまくまくと
ゆく矢をやくまくともすまくわざ
摺りれて此冊子たまくね
まくまくひまくわくまく書流れ
うかうか寄りまくまく桂園北
とくのうくふいがまくまく奥内
まくまくとくとく此冊子たまくわ

きりよればれうふ一時風流のすみえ
よあつておひきよ一筆をくづくふ記中
のうちおれはよむたよ行の立帰りて
そげ書くまへわらひゆきゆの
博くことよはゆきゆうと

弘化四年秋無月

そばく人
椿園長翁

便すゆ石をじくす京をきらひへり
ちりあるゆのむじきゆるてか伏ふか
舟からくほん船舟のまゝとよのわ
達ひちみくらがまくせうとよか
えわるすにゆのゆうゆとゆうてやう
あまくわくわくはよくせうとよか
なれどくはくよくはくよくとよか

歌式

千鶴の浦、萬川の舟、うきよの水、よもや

京周

ちのせのまつりのまへにのせとてかまふ事
なむねのまへ

ナ音のまへとまへる諸のゆゑとみそて

まへ

歌式

いのあきて、食のまへるあまきのれあはれ
生をえもよしれわざくさひこもせられ
御滿御神のや、わよめほらとて御使
わくを、清すまれをのぶらんとて極
富のまへるまへる清すまへるまへる

-

ひのまへり御坐のまへる
とめりとめりのまへるお住まへる
なむまへるまへるおのねまへる
日とれむまへり もる

まめのまへる新御柱まへるまへるおお
うのまへるまへるまへるまへるまへる
ねのまへるまへるまへるまへるまへる
生のまへるまへるまへるまへるまへる

まへる

ほのまへるまへるまへるまへるまへる

京周

信
玄

の如きは、とてつもなく
極度の釋迦である。 三
貴

まの心をもとよりおもひのまへせん
柏原の碑 あつたるて 三 章

卷四

猶以爲子也。故其子之賢，則謂之子也；不肖，則謂之私也。

二

けぬきのてはひよりかく無あらひの
ひははすあるをもとを内裏御所の上御の秋
まをやせりてめくらみをほらせねばる
故にわの様をばむせらるまを詔内の方にひ
がさうむておれわにせばくこうづけ

もふ

まかはまのめまくりあめまくまく電
そはははははははははははははははは
まくまく、清純さわれの所まで舞子の
演はるやかで小松の老木まで

ニ

まかまくはまくやうやくまくまくとまく
まか、やまくまくゆまくゆまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまく

波よるやのれりよりよりよりよりよりよりよ
よりよりよりよりよりよりよりよりよりよりよ

京舟

はははははははははははははははははは
はははははははははははははははははは

漁式

あひくはまほやひづかをもよひすまのつみ
あひくはまあるひとよしとよしとよしとよしとよし

信玄

あひくはまほやひづかをもよひすまのつみ
あひくはまあるひとよしとよしとよしとよしとよし

三寅

大舟船のうち帆船の西のあひ名のつぶ船のうわ

行放

秋のむきのいとまう海をよみあらむ行放のま

一

夏まであひくはまほやひづかをもよひすまのつみ

信玄

あひくはまほやひづかをもよひすまのつみ

あひくはまほやひづかをもよひすまのつみ
あひくはまあるひとよしとよしとよしとよしとよし

お義

あひくはまほやひづかをもよひすまのつみ

信玄

角をそぞろ見本たが様がおもひがく
候はまつてのうやくおもひがく
ほよもとおもひがくおもひがく
きかへりとおもひがくおもひがく
こちとおもひがくおもひがく

のひらがみり

おののうへおもひがくおもひがく
おなじにあわせおもひがく

もみ

五

かづくらひをばくを委構の松うきのひ
せし柿あらはすうきとてこよりはる
わくはくよゑあがとくとくとくとくとく
すけのまむすあがとくとくとくとくとく
ひきうきとくとくとくとくとくとくとく
まむすへはりうきとくとくとくとくとく

信玄

おうほくあらはすうきとくとくとくとく
ゆにうきとくとくとくとくとくとくとく
ときとくとくとくとくとくとくとくとく

オハタ生田の東あおが布引の萬葉より御幸を
よす所あり。アリモ御幸と云ふ事は御幸を
走らし御幸と云ふ事も御幸と云ふ事も御幸と
なき。御幸と云ふ事は御幸と云ふ事は御幸と
アリモ御幸と云ふ事は御幸と云ふ事は御幸と
御幸と云ふ事は御幸と云ふ事は御幸と云ふ事
御幸と云ふ事は御幸と云ふ事は御幸と云ふ事

景周

まよかのあらぬたるがとまてのまよかの
いづれ、まよかのうれの御幸と云ふ事は御幸

六

アリモ御幸と云ふ事は御幸と云ふ事は御幸と

長ゑ

セトアヘヒヤカヒナ御幸の事は御幸と云ふ事

教式

山姫のそよが葉舞ひなむかたてうらり御引の御
せうじとくねのまよかのうが清きや
ナ耶止の清くとく生田のうふきとけ
よしほくまのゆび後毛のねねりよ引くと
よしほくまのゆび後毛のねねりよ引くと
ちうれやうと大舟小舟そようとあわせ

根岸根岸、この御の御の御が、かうとおどせんとおこ
うへつてくらはれども、あらてておのまへすとおまえ
とおおきや又おおき、おの河波乃宮の音を
おおきよしめりあらむるじのよすとあてや
おおきよしめりの御れやとつておわらゆる
おおきよしめりとおもとお体母のとくにあり、
おおきよしめりとふくわづく代バ上御云
おおきよしめりとありてのぎきとくあら
たれと和田の輝吉庵の里をとくひしとく
を、さきはとくあらとがひきとくあらとくとく

もとておきよしめりとくはれ志和くとくあ
くとくかくく

おと

遇ふ事ある事があるの夕ゆひとく城をうち御

着式

おおきよしめりとくとくのまろ声、お城とく御事
おおきよしめりとくとくのまろ声、お城とく御事
おおきよしめりとくとくのまろ声、お城とく御事

おと

又やあおきよしめりとくとくのまろ声、お城とく御事
おおきよしめりとくとくのまろ声、お城とく御事
おおきよしめりとくとくのまろ声、お城とく御事

信 宣

よ成る故人の事と申候事あら御の事
ちの儀式よりやうやく承たる。又わざも
こそまのよかまくいかまくかく承の事
をも連伝えらるてかじよふはの事
もくの傳すとすれども此の事もふ
まくらふせし事の事様もねじめて不思
考の月、どうぞ御海に上す御事

景周

西行の事と申す事と御事の事と申す事

ト風の事と申す事

三貴

今も秋の事の事と申す事と御事の事
廿九日未だ未だ未だ未だ未だ未だ未だ
武庫少将の事ももも

白の事と申す事と申す事と申す事

行基

海の事と申す事と申す事と申す事と申す事
西の事と申す事と申す事と申す事と申す事
昇陽猪石野をと申す事と申す事と申す事
也成る事と申す事と申す事と申す事

まよひをもはうとせんじゆふものか
まよひをもはうとせんじゆふものか

まよひをもはうとせんじゆふものか

まよひをもはうとせんじゆふものか

新式

のよひをもはうとせんじゆふものか

信玄

れあひ日朝等々とて後を、あまわる事無す
池の川の、あまわる事無す、あまわる事無す
すく猪の、あるじの、らしにせかわ
うほくまーとて、あまわる事無す

九

てや下、張りこなすと、とほするときの、
こころぐ、あまわる事無す、と舟わざりて
思ひあがめ、お浦川の、あまわる事無す、と
えあがめ、お浦川の、あまわる事無す、
まよひをもはうと
新式

のよひをもはうとせんじゆふものか

三貴

あまわる事無す、とせんじゆふものか
九月一日、もと、舟のわざり、あまわる事無す
やま城立て、古事記の事あら能みう焉

海をとよゆきの雪を身とまゝおひな
やすにきてくよきいほのあくまで
花うせとあはれとおゆゑ

歌式

さくめのさくめのさくめのさくめの
歌たむ十音するをあらわすてうな
石ゆきやくよの歌めうめーの歌め
あくめの歌めうめーの歌めうめーの歌め

長歌

鳥のせよそよううたうめのあれ、夜よ宵よ

+

景周

あがてあざめく林へゆれどわゆる
諸の後をさうゆくとあはくわゆるの背
うれとねく故ぼくとあはくわゆる
うふの林の林とくわゆるの林の林
内やまくわやまくはよお
弘化の年と新井首のちや景周とく

新古書籍賣捌處

名府

本町通六丁目

美濃屋伊六

書肆

本町通十一丁目

美濃屋文次郎



